

志の伝承

奨励	山本 真司〔やまもと・しんじ〕
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校教諭 日本キリスト教団錦林教会兼務担任教師 同志社評議員

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かります。

信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています。信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです。信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです。信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかしこみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました。

(ハブライ人への手紙 ―一章―七節)

ミシュランと京都の風土

「数百年の老舗の仕事が駅伝だとすれば、一年毎の評価を気にするのは百メートル走。とても一緒に走れない」。ある老舗料亭のご主人の談話です。とうとう、かのミシュランが京都の老舗割烹を格付けしようとして画策しているようなのです。フランスのタイヤ会社がなぜわざわざ極東の島国にまでお越しになって評価をしようとするのか、私には見当もつきません。一九〇〇年のパリ万国博覧会に向けて、自動車運転者のためにミシュランが無料で配布したのが、このガイドブックの始まりだということです。当時は郵便局や公衆電話の位置を示した市街地図、都市別のガソリンスタンドやホテルの一覧、簡単な自動車の整備方法が書かれていたそうです。この万博を機に自動車旅行が活性化し、タイヤの売り行きを伸ばすことが目的だったようです。その後、無料から有料になりましたが、その理由は、「人は無料で配布されるものを大切には扱わない」と感じたからだそうです。ミシュラン兄弟が、ある自動車整備工場でガイドブックが油にまみれて捨てられてあったのを見たせいだとも言われています。

さて、この動きに対して、「ミシュランの評価を受け入れない姿勢こそ、京都らしい対応ではないが、京都に多い『一見さんお断り』の店は誰でも入れないのが魅力の一つ、各店のポリシーがある。同じ基準で評価するミシュランとは相容れない」という意見が一方であり、「世界のグルメが和食を食べに日本に来る国際化の時代。観光都市・京都の各店がミシュランの評価をボイコットするなら残念な話だ」という反論もあります。私は京都の「一見さんお断り」という伝統は、京都独特の排他的なイ・ケ・ズだと、かつて思っていましたし、どうせそんな格式の高い老舗には縁などないしと拗(す)ねてもおりました。しかし、しばらく暮らしてみますと、このシステムは、濃厚な人と人との関わりを大切にするための類まれな方法だということも徐々に分かってまいりました。お馴染みさんを大切にするポリシーを徹底するためには、いつでも快適な接待空間を確保しなければなりません。そのためには「客を選ぶ」という、いささか新参者にとっては辛い制度を守る必要があるのだろうと感じます。また、うっかり支払いができない、手元不如意ということもあるかもしれません。そういうときに、常連客の知り合いということで、改めて払うことができる。うっかりした客も恥をかかずに済みますし、お店の方も取り逸れがないので安心な制度なのだろう、と思うのです。ひょっとすると、「一見さんお断り」という一見、スーパー・イクズな京都方式は、長い歴史に支えられた人と人との関係を円滑に保つ智慧なのではないだろうかと思うようになりました。このような気持ちで今回のミシュラン登場、という事件を見ますと、「おおきに、フランスのお星さん、ぎょうさん、付けてくれはるそうどすなあ。そやけど、折角ですけど、遠慮させていただきますわ(後ろを向いて、「しょうもないこと、しやるわ)」ということになるだろうと思うのです。なぜなら、私は、新しい文化と古い文化の併存、どちらもうまく受け入れていくことが本来の意味での国際化だと考えているからです。このことが取りも直さず、京都の風土なのではないでしょうか。直接的な物言いはなくて、間接的に拒否する、あるいは受け入れる智慧が隠されているような気がしております。柔らかに相手に意志を伝えたり、情報を提供する永い時の伝承を感じるのです。

振り返って、学校も「一見さんお断り」ではありませんが、お互いに選び合う世界という意味では、同じような質をもっているのではないのでしょうか。生徒・学生が入学を希望し、学校が選抜する、この構造は「選ぶ」という発想だけを考えると、共通しています。問題は何を求め合っているかということでしょう。同志社が育んできた一三三年の精神がどのよう

新島襄とチャペル

さて、私たちの同志社は、新島襄の高い志をどのように伝えてきているのでしょうか。新島襄のこゝばに耳を傾けてみようではありませんか。

「ここに礼拝堂の定礎式を行い神に祈りを捧げるにあたって、チャペル建設の事情についていささか所見を述べたいと思う。そもそも教育は宗教と密接に関係するものであって、教育の基本は宗教にあるというべきである。

したがって欧米文明諸国の有名校ではどこでもチャペルのないものはない。しかも、それはもっとも美しく設備が整った建物である。なぜならばそれは、教育と宗教の関係が一体であることの当然の結果だからである。

それゆえわが同志社の教育もまことにキリスト教と密接な関係を有するものである。こうして今日この定礎式を行い、この建物を神に捧げるのは、行く末大いに喜ぶべきことであると思う。なぜならばこのチャペルはわが同志社の基礎となり精神となるものだからである。

西洋諸国の学校は、宗教が教育にとって不可欠であることをすでに認識し、宗教を尊重しているのであるが、わが日本ではまだそうなってはいない。キリスト教を蔑視するのが学生の常である。わが同志社にもこの宗教を嫌う者がいないわけではない。それでも今日このチャペルを神に捧げることができるのは、まことに進歩を表わしているというべきである。また今日の時勢を見れば、このチャペルはまことにわが日本に対して大いに関係があるものであると信じている。

先にも述べたように西洋諸国においては、宗教と教育とを並行させなければ本当の教育はできないとする。アメリカ合衆国のコルドバ大学のような大学は、断固キリスト教を排除する精神に基づいて設立され、多数の人々の大口寄附によって支えられたのであったが、結局その主義を貫徹することが不可能となり、近年では有名な伝道者を招き学生に向ってキリスト教の真理を説くようになったという。

このようなことを見れば、チャペルは学校から絶対に無くしてはならないものであると思われる。要するに、チャペルはわが国に大いに関係があるだけでなく、わが校の学生がこれをもつて精神となすべきものであるということにつくる。」

(『現代語で読む新島襄』一八ページ『新島襄全集1』一〇五ページ)

この祝辞で、新島襄は現実が決してキリスト教にとって平坦な道ではないという、冷静な状況認識を土台にして、それでもなお、チャペルが同志社の中心であり精神だということです。スピリット・ウィークに際して、改めてこの精神を確認したいものだと思うのです。

志の持続

学校以外に例を挙げてみましょう。松下幸之助は「志を立て決意することは大事だが、それ以上に大事なのは、その初心を持ち続けることである」と事業の初志とその継続の困難性を看破しておりましたが、ついに、その松下でさえブランド力強化のために「松下」の看板を書き換えてしまったことは記憶に新しいことです。しかし、それでもなお、創業者のスピリットは生き続けていると感じるのです。では、この原動力は何か。「松下電器は人を作る会社です。あわせて家電を作っています」という企業理念を見失っていないからだとは思いますが、モノを作る企業が人を作ると宣言しているのです。まして、同志社は教育機関です。しかもどのような人を作るのかを創立者が明確に語っている学校なのです。そう

は言っても、確かに多くの試練があり、これからあることでしょう。それに対して先達が、そして私たちが苦渋の選択を繰り返しながら一三三年目を迎えています。やむを得ず決断したこともあるでしょう、力及ばずに諦める事態もあるかもしれません。しかし、そこに確かな志、意志があるのならば、具体的な表現方法は変化しても、私たちはその息吹を感じ、次の世代に伝えていくのではないのでしょうか。

私は、なかなか光が見えてこないときに、また、失敗するたびに、トーマス・エジソンのこゝばを思い起こします。

「私は一度も実験を失敗したことがない。この方法では電球は光らないという発見を二万回していたのだ」。あるいは「私は一〇〇〇を超える発明をし、世界の発明王などと言われているが、実際には自分が発明したのではなく、宇宙という大きな存在からのメッセージを受け取り、自分なりの記録を取ったにすぎない。つまり、自分自身が自然界からの受信機であった」。

この一貫した信仰にも似た発明への思い、また謙虚さが、現代に生きる私たちにも響くこゝばではないだろうかと思うのです。彼が自然界からの受信機であるとしたならば、私たち、同志社に学び、教え、働く者は誰もが同志社を建て、ここまで導いた不思議な神の御手の受信機なのではないのでしょうか。

道半ばにあって

「諸君とともに過去を追想して記念としたいのは、昨年私が不在中に同志社を退学させられた人々のことである」。新島襄は一八八五年創立十周年記念会の祝辞を涙ながらにこのように始めたと言われています。

ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった。諸君よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である。過去はすでに過ぎたことなのでどうしようもない。しかし、今後については私たちはまことに用心深くありたいものである（先生は涙を流し、胸をつまらせながら述べられたので、満場ひとりとして涙ぐまない者はなかった）。

ここに帰路の航海のことを紹介して少々私の気持ちを明らかにしたいと思う。船がサンフランシスコを出帆すると海上は暴風になり、乗客たちは大変苦しみ、私も少々疲労した。しかし、船長はこの困難にもかかわらず、通常の航路とは違う迂回路を進んだ。十数日間、実に困難を極めるなか、間もなく日本に着きそうになりながらもおよそ二、三三百里ほど進んでようやく西北に向かい、日本の港〔横浜〕に入港したのであった。

これまでのわが同志社の歴史もまたこれと同じである。実に困難のなかをひたすら神によってこのような進歩をなしたのである。しかし、本日の十周年記念会も決して喜んでいる時ではない。まだ目的の港に到達していないのである。現在現われている結果はまだ完全なものではなく、数百年後でなければ真に喜べる時代とはならないし、真に見るべき成果は出てこない。しかしながら、わが同志社はこの進路を決して変えることはないのである。（『現代語で読む新島襄』一八四ページ 『新島全集1』一〇七ページ）

ところで、私たちの同志社は、規則が少ないことが特徴の一つだと思います。それは新島襄が徹底して「法三章」を理想としたからです。法三章というのは、『史記』の引用ですが、漢の劉邦が秦を滅ぼした後、秦の始皇帝が定めた厳しい法律をやめて、殺人・傷害・窃盗を罰する簡単な法令を定めた故事です。法治万能主義で人を縛ると規則を恐れて人間はその枠のなかで小さく生きなければならない、自由な発想が阻害される、所詮（しょせん）人間の作る規則などというものには限界がある、と言うのです。反対に、規則をできるだけ少なくすることで、お互いの矮小な人生観や世界観にとらわれず自在に発想することができ、社会は進歩するということでしょう。新島襄は「弱く、小さなもの」を大切に考えました。同時に、「強く、大きなもの」を排除しませんでした。学校や組織の枠からはみ出そうとする未来の利器を、学校から排除したり、型にはめ込もうとすることを最も嫌ったのです。

同志社は創立一三三周年を迎えて、大きな学校になりました。しかし、新島の抱いた理想の学校は、まだその道半ばなのではないでしょうか。いま、私たちは志を受け、それをまた発信する役割を与えられています。弱者や少数者を大切に教育機関であり、小さな枠にとらわれない自由な学園へと歩みを進めたいものだと思います。

二〇〇八年十一月四日 同志社スピリット・ウィーク
火曜チャペル・アワー「奨励」記録